

大阪・関西万博開催に向けた御意見

御所属 東京大学 教授 御名前 隈 研吾 様

1. 2025年の大阪・関西万博に何を期待しますか。

(是非すべきこと、また、すべきではないこと、後世に残すべきもの等)

- 人工の場所で万博を作るとするのは、得てして殺伐としたものになりがちである。人工的な環境の中に何か1つのVillage(村)のような空間を作り、現在の環境・人工的な埋立地でもヒューマンなものが出来るとことを示すことが出来ればとよいと考えている。
 - 工業化社会の万博は、70年の大阪万博がピークであった。そのときの万博会場は、工業化の素材(金属)で出来ていた。それとは対照的なヒューマンな会場になればよい。

2. 大阪・関西万博で見せるべきコンテンツは何でしょうか。

(例：最先端技術の実証、SDGs達成への貢献、ライフサイエンス分野との連携等)

- 現代の万博は映像中心になっている。映像があつて悪いということではないが、映像の世界であれば、森ビル・チームラボのようなコンテンツは万博でなくとも見ることができる。映像コンテンツで競争する万博は避けたほうが良い。
- 人間が直接的に体で体験できるものであればよい。一方、何千万人という人が来場するため、来場者にどのように体験してもらうかというノウハウの部分でデジタル技術が活躍するのではないか。
- 大きな映像の世界ではなく、遊びが重要ではないか。日本には体を使って自然を体験する遊び(潮干狩り等)がたくさんある。自然と遊ぶ場所があると良い。

3. 会場計画及びインフラ整備について、新たなアイデアや御意見をお願いします。

(例：会場のデザイン、水面や緑地の利活用、待ち時間のない万博とするための手法、災害対策、暑さ対策等)

- 会場計画の中で、一部埋め立てられず水面が残るという制約があることは面白い。人間の手のつけられない「環境的な他者」を感じる。地形的制約がストーリーになり、ナラティブな会場ができる。来場者が、こういう制約があるから、こういう造りになっているということを理解することができる。
- 計画では分散型で中心を作らないということであったが、ある種の記憶に残る中心があると良い。建築で地形を作り、その地形が記憶に残る等、建築の中で記憶に残るものが出てくるとよい。
- 水路と周りのデザインはすごく重要である。水路は万博後も残せればよい。水面に花火を上げる案はどこでも行われているため、それとは異なる取り組みをした方がよいのではないか。
- 子ども達が入っていける水路を作らなければならない。それによって会場の風景が変わる。水路でどのような遊びをするか。水路での遊びの装置のアイデアを募る必要がある。水遊びでも様々な水遊びがありうる。

4. そのほか、御自由に御意見を申し上げます。

- 若い人の登用は、どんどんやればよいと考える。そのためには、ものづくりの人たちとコラボレーションが重要ではないか。デザインだけが先行するのではなく、デザインをする人ともものづくりの人が連動して一緒に提案してもらい、そういった提案を吸い上げるシステムがあるとよい。デザイナーともものづくりと連動するというのが、これからの日本の力になる。
 - 万博に対して、若い世代の中はある種の心理的距離があると感じている。そのイメージを壊す枠組みを創るのは、ものづくりだと思う。
 - デザイナーがデザインを書いて見積もりを取るのではなく、デザインともものづくりが最初から一体になって計画を立てるやり方が良い。
- 海外の人間との連携も重要である。特にアジアのデザイナーは、日本で仕事をしたいと思っている人も多い。海外の人材を巻き込み、連携することも必要である。
- 愛知万博では、コストと時間の制約のため理想的なものを作るまで至らなかった。コスト・時間切れになることを防ぐために、提案する部分にメリハリをつけることは重要である。計画の中でこの部分は譲れないというメリハリをつけると良いのではないか。

以上